

『老人と海』における女性の不在をめぐって

新 井 哲 男

『老人と海』(*The Old Man and the Sea*)は、衆知のように、大魚を相手にした、老人の3日間にわたる不屈の闘いを描いたものである。84日間も不漁が続きながら、老人は決して絶望しない。彼は、海の色と同じ青い目をしており、毎日毎日が新しい日だと知っている。彼は、どんな逆境にも耐え、人間が何に耐えられるかを示す。彼は、「人間は破壊されることはあっても、敗北することはない」(p. 103)⁽¹⁾と考える。まさに、不撓不屈な魂の持ち主である。

ところで、『老人と海』は、1952年9月1日号の雑誌『ライフ』(*Life*)に発表され、その一週間後の9月8日に単行本として出版されたもので、完成されたものとしては、ヘミングウェイ(Ernest Hemingway)の最後の作品である。彼は、これまで数多くの長編、短編を書いてきた。処女作『我らの時代に』(*In Our Time*)の最初の短編「インディアン部落」(“Indian Camp”)では、自分を抑える男の腕にかみつきながらも、麻酔なしの手術に耐え、無事、男の子を出産する女の精神力の強さと、妻の出産状況に耐えられず、自殺してしまう脆弱な男の姿を対比して描いた。そして、これを目にしたニック(Nick)が、「自分は決して死なない」⁽²⁾と決意して以来、ヘミングウェイは、一貫して、強い男を求めてきた。『老人と海』の老人は、まさに、このニックの決意を成就させた人間である。

では、老人が、かくも強い人間になれた理由は、何であろうか。その要因は、いろいろあるであろう。かつて、私が老人の心の支えになっていると指摘した少年の存在も、その一つである。⁽³⁾ここでは、作品の最後にあらわれる旅の人を除いては、『老人と海』に、女性が一人もあらわれていないことに、目を向けてみたい。

さて、論を進めるにあたって、『我らの時代に』の中に収められた「医者と医者の妻」(“The Doctor and the Doctor's Wife”)との比較から始めたい。なぜならば、先にも述べた通り、『我らの時代に』は、本格的出版物としては、ヘミングウェイの第一作であり、そこに収められた作品と、最後となった作品とを比較検討することは、興味深いことであるし、また、「医者と医者の妻」と『老人と海』の間には、種々の興味深い類似点、相違点がみられるからである。

第一に、「医者と医者の妻」と『老人と海』には、共通して少年があらわれる。しかも、主たる登場人物と少年とは、強い心の絆で結ばれている。「医者と医者の妻」では、医者であるニッ

ク父は、妻との間の気まずい雰囲気から逃れて、森の中に入っていく。そして、木の根元に腰をおろし、本を読んでいるニックの姿を見つける。彼は、「用があるから来て欲しい」という妻の伝言をニックに伝える。しかし、ニックが、「お父さんと一緒に行きたい」というと、すぐに承知し、2人仲良く森の中に入っていく。作品の終わりにおかれた「おまえの読んでいるその本を貸しな。ポケットに入れていってやろう」「お父さん、ぼく、黒リスのいる所を知ってるよ」「よし、そこへ行こう」(p. 27)⁴⁾という会話は、父と子の心の通いあった強い絆を示すものである。

『老人と海』の結末はどうであろうか。少年は、老人が漁に出てから4日目の朝、小屋で寝ている老人の姿を見つける。彼は、老人が息をしていることを確認すると、老人の手を見る。作品では、冒頭に、不漁の続く老人の手の描写として、次のように書かれている。

... and his hands had the deep-creased scars from handling heavy fish on the cords. But none of these scars were fresh. They were as old as erosions in a fishless desert. (p. 10)

しかし、今、老人の手は、「魚のいない砂漠地帯での風化作用のような古い傷」ではなく、つけられたばかりの新鮮な傷で、切り刻まれている。少年は、老人から、何も聞かずとも、老人の味わった辛い経験を悟る。彼は、声をあげて、泣く。泣きながら、老人のために、コーヒーを取りに行く。そして、老人が目をさますと、2人は、大魚の始末について、留守中のことについて、将来のことについて、心楽しい会話をくりひろげる。作品の終わりでは、ライオンの夢をみて眠っている老人を、少年が見守っている。

このように、「医者と医者の妻」と『老人と海』は、共に、主たる登場人物と少年との心の交流を示す場面で終わっている。しかし、この心の交流には、違いもある。家系的にみれば、一方は、本当の親子であるのに対し、他方は、他人である。

『老人と海』では、少年は、自分が老人の船を離れたことについて、それを親の責任とし、「僕は子供だから、親の言うことに従わなければならないんだ」(p. 10)と言う。老人も、これに同意する。老人は、また、「もし、おまえが俺の子供だったら、おまえを連れだして、一か八かやってみるんだが」(p. 13)とも言う。即ち、老人と少年とは、非常に親密な関係にありながらも、2人の中には、家という壁が存在するのである。

しかし、老人が、大変な苦難を乗り越え、帰港した後では、2人の関係は変化している。少年は、「また、一緒に漁をしよう」と言い、老人の「おまえの家族が何と言うだろうか」という問いにも、「そんなの構やしない。……これからは、一緒に漁をしよう。僕には、まだ、教わらななきゃならないことが、たくさんあるんだから」(p. 125)と言う。老人も、この言葉を受け入れる。即ち、少年は、2人の間に横たわっていた家という壁を乗り越え、親の支配下から離れ、自

分の考えに基いて行動しようとしているのである。これは、「医者と医者妻」で、母親の要求を拒否して、父のもとについていくことを好むニックと行動が類似している。

老人と少年、医者とその息子、2人の年長者と2人の年少者との関係は、確かに、家系的には異なっているものの、その相違は、ほとんど意味がなくなっている。『老人と海』の少年は、家の壁を乗り越えており、2人の年少者は、共に、何かの重圧をはねのけて、主体的な行動に出ている。

しかし、「医者と医者妻」に描かれた父と子の心の交流と、『老人と海』に描かれた老人と少年の心の交流の間には、大きな違いがみられる。それは、心の交流が描かれている場所の相違である。

「医者と医者妻」で、父と子が出会う場所は、森の中である。彼らは、出会った後、家には帰らず、更に森の奥へと入っていく。ディック・ボルトン(Dick Boulton)と口論をし、疲れて帰ってきたニックの父は、自分の部屋の自分のベッドで銃を磨き、銃弾の出し入れをしながら、一時の憩いを得るが、壁を隔てた部屋から聞こえてくる妻の声に、心をかき乱され、家を出て、森へ入っていく。家には、安らぎがない。

一方、『老人と海』の終わり近くで、老人と少年がいるのは、老人の家である。老人は、誰も行ったことがない沖まで小舟を出し、誰も見たことがない大マカジキを鉤にかけ、その肉すべてを失い、遠くまで出すぎたと口にしながら帰港し、今、自分の家に戻っている。大きなヤシの葉やヤシの若芽を包む鞘でできた、一間だけの粗末な小屋とはいえ、老人は、今、自分の家に戻っており、自分の家で、心の通いあった少年と話をし、安らぎを得ている。

ニックの父が、家には安らぎを見いだせず、家を出て、森で安らぎを得ていることと、老人が遠い海から帰ってきて、家で安らぎを得ていることとは対照的であるが、このことに関しては、後に、詳述することとして、「医者と医者妻」と『老人と海』との類似点、相違点をもう少しみてみよう。

この両作品には、医者や老人を挑発し、からかう人物が登場する。

「医者と医者妻」には、流木の件で喧嘩を売るディック・ボルトンという男がいる。医者は、後で、妻の質問に答え、「ディックは、妻の治療代がわりに働くのがいやで、喧嘩を売ったのだ」(p. 26)と述べているが、その真偽は明きらかでない。しかし、重要なのは、喧嘩の真の原因を探ることではなく、医者が、売られた喧嘩を買ったということである。

喧嘩の真の原因が何であれ、直接の原因は、ディックが、流木を自分のものとするのを盗みと考えている点にある。医者は、たとえ、落とし主がいようと、回収しにくくすることは、まずないのだから、丸太は、浜辺で水浸しになり、朽ちてしまうのがおちだと考えている。実際には、医者のように考えた方が、現実的であるのかもしれない。しかし、ディックの言い分にも、

一理ある。だが、医者には、ディックの言い分には、少しも、耳をかさず、ディックが語れば語る程、いろをなして怒る。そして、遂には、暴力に訴えることまで口走る。

医者は、ディックの側にある正当性が、わかっていたからこそ、怒ったのかもしれない。或いは、自分は、白人であり、しかも、白人社会の中でも上流とされる医者であるのに対し、ディックは、インディアン、しかも、妻の治療費のことで、自分には負い目があるはずのインディアンであり、その者に、自分の非を咎められたことで、感情が爆発したのかもしれない。医者は、「先生」という呼称を皮肉にとらえ、その言葉が発せられる度に、怒りを増していく。

確かに、ディックの側には、医者を揶揄してやろうという下心があったと推測される。しかし、たかが使用人の言葉に、あれほどまでに、いろをなして怒る医者側にも、傲慢さがあることは否定できない。

『老人と海』には、老人を揶揄する人の姿は、多くの言葉を弄して書かれてはいない。わずか2行書かれているだけである。

They [The old man and the boy] sat on the Terrace and many of the fishermen made fun of the old man and he was not angry. (p. 11)

ここでは、「医者と医者の妻」とは異なり、彼らが、どのようにして、不漁の続く老人をからかったのか、どんな言葉を用いたのか、全く書かれていない。重要なのは、人々の揶揄の仕方ではなく、老人が、多くの人からかわれもしたが、腹をたてることが全くなかったという事実である。ニックの父である医者とは、対照的である。

では、老人は、なぜ、からかわれても、立腹しなかったのだろうか。その理由の一つとして、彼が老人であったということが考えられる。老人という言葉からは、「人生を長いこと生きてきて、老いぼれてしまった人間」というイメージと、「人生を長いこと生きてきて、人の世の機微を何もかも知りつくし、精神的にも、技術的にも円熟した人間」という二つのイメージが浮かびあがる。『老人と海』に描かれている老人は、後者である。『老人と海』だけでなく、『日はまた昇る』(*The Sun Also Rises*) のミピポポラス伯爵 (Count Mippipopolous), 『武器よさらば』(*A Farewell to Arms*) のグレッフィ伯爵 (Count Greffi), 『誰がために鐘は鳴る』(*For Whom the Bell Tolls*) のアンセルモ (Anselmo) とヘミングウェイの描く老人には、後者が多い。

『老人と海』の老人の身体は、彼の乗る小舟の帆のように、ぼろぼろに老いぼれている。しかし、眼だけは、海と同じ青さをたたえている。彼は、大金が転がりこめばモーター・ボートを買う若者とは異なり、ただ金もうけのために魚を釣ることはしない。魚を釣ることが彼の天職であるから、釣るのである。彼は、釣る釣れないよりも、釣り綱を垂直にたらすことに気を使う。そして、魚が釣にかかった後では、闘争相手の魚を敵ではなく、友とし、「兄弟」(p. 92) とも呼ん

でいる。彼は、「魚と俺と、どちらがどちらを倒しても構わない」(p. 92) と言い、魚に人間の忍耐力の強さをみせるのだと頑張る。まさに、彼は、魚との戦いに生命を燃焼させており、漁師として生まれついた自分の生を享受している。

円熟した境地にいる老人は、はるか年下の少年に対しても、謙虚な態度で接している。彼は、少年が、老人の誇りを傷つけることを恐れながらも、ビール代をもつことを申し出た時、その申し出を快く受け、「漁師仲間じゃないか」(p. 11) と答える。また、ある時には、老人は、少年に、「おまえは、もう一人前の男だ」(p. 12) と言い、少年を一人前として扱う。彼は、また、自分の釣具は、他人には絶対運ばせないという少年の今の親方とは対照的に、少年を信頼し、少年がまだ5才の時から自分の釣具を運ばせている。更にまた、少年が老人のために餌を持ってくると言った時、最初は遠慮するが、結局は受け入れる。そして、その後で、「へり下ることは、恥ずかしいことではないし、そのことで本当のプライドが少しも失われるものでもない」(p. 14) と考えている。老人は、からかわれた時だけでなく、いつでも、誰に対しても、ゆとりを持って接しているのである。

傲慢な所がなく、へり下った態度でものを眺められる老人は、ゆったりとした心で、ものをみつめている。彼は、帰港すると、毎日、釣具を船からおろし、小屋まで運ぶが、それは、盗まれるといけなからではなく、「このあたりには、ものを盗むような人はいないとわかってはいるが、不必要な誘惑物をおいておくのはよくないことだ」(p. 15) と考えるからである。海に出ると、老人は、闘争相手のマジキはもちろんのこと、海、飛び魚、小鳥、星、月と、目にするものすべてに愛情を捧げていく。

彼は、なぜ、これ程までに広い心を持ちえたのだろうか。老人の小屋の壁に貼ってある2枚の聖なる絵に、注目したい。この2枚の聖画は、「老人の妻の形見の品」(p. 16) と記されている。実際には、この作品中に、老人の妻はあらわれていないので、彼女が、どのような妻であったのか、判然とはしない。しかし、老人の妻に関する数少ない記述の一つが、聖なる絵であるということは、少なくとも、彼女が、信仰心の厚い宗教的な人であったことを推測させる。

ここで、先に比較した「医者と医者妻」をみてみよう。ニックの母、つまり医者妻は、クリスチャン・サイエンスの信者である。つまり、宗教心厚い女性である。夫の帰宅後、外で一騒動あったことを察知した彼女は、「思いおこして下さい。自分の心を治める者は町を攻め取る者にまさるのよ」(p. 25) と、聖書の言葉を引用し⁶⁾、医者立腹しやすい気性をたしなめる。また、ディック・ボルトンとの口論で、誇りを汚され、傷つき、心の癒しを求めて、家に帰ってきた医者に、彼女は開口一番「あなた、仕事に戻らないの」(p. 25) と言う。彼女は、また、言い洩る夫に、喧嘩の原因を執拗に尋ね、ようやく述べた夫の言には、「そんなことをする人がいるとは思えない」(p. 26) とくり返す。医者は、家にも安らぎをみいだせず、森へ入っていく。

「医者と医者妻」の医者と同じように、主人公が家を出ることになる「兵士の家」(“Soldier’s Home”)のクレブス(Krebs)の母も、宗教心厚い女性である。クレブスは、母親の深い信仰心に基づき説教を聞きながら、吐き気さえ感じる。母親の説く言葉の合間に挿入された「クレブスは、(焼きたての)ベーコンの脂が皿の上でだんだんと固まっていくのを見つめていた」⁽⁶⁾という文は、母親の説教を聞いている際のクレブスの心境を、よく表わしている。医者とその妻、クレブスとその母、一方は夫婦で、他方は親子と、その関係は違うが、家を出ていくことになる医者とクレブスの心の上には、それぞれ、妻や母の姿が重くのしかかっている。彼らは、それらを払いのけようとして、家を出ていくのである。

先にも述べたように、『老人と海』には、老人の妻についての詳しい記述はない。そこで、彼女が、宗教心厚い女性であったという以外、どのような女性であったのか、読者にははっきりとしない。しかし、老人に、医者妻やクレブスの母のように、人の心を押さえつける妻がいたとすれば、即ち、不漁で帰ってくる老人に、口やかましく述べる妻がいたとすれば、老人は、確実に、今まで述べてきたような寛大で、ゆったりとした心をもつ老人にはなっていなかったことであろう。

The fact is that Hemingway’s sense of the relationships between people, and particularly between men and women, is that they are invariably destructive.⁽⁷⁾

フェイス・プリン(Faith Pullin)は、ヘミングウェイの人間関係について、上のように述べているが、「特に」と記した男女関係に限って言えば、妥当な見解といえる。『老人と海』には、老人を押さえつける妻がいないからこそ、老人は、あれ程自由に、心の向くままに行動できたのである。

ニックの父も、クレブスも、安らぎを求めて家を出て行ったが、老人は、安らぎを求めて家に帰ってきた。かつて、『我らの時代に』の「国境の雪」(“Cross-Country Snow”)で、妻のいる家に帰る日のことを思い、陰鬱な気分になるニックの姿が描かれたが、それとは、対照的である。老人は、帰路、「うちまかされた時には、ベッドは安らかなものだ」(p. 120)と考えている。実際、帰港後、彼は、妻のいない小屋で、ベッドに横になり、たっぷりと眠り、少年と心休まる会話をかわしている。そして、作品の最後では、少年に見まもられながら、老人は、自分が決して挫けてはいないことを暗示するライオンの夢をみて眠っている。

皮肉ではあるが、『老人と海』では、妻が直接登場しないことで、妻にも愛情が捧げられている。老人は、かつては部屋の壁に貼ってあった妻の写真を、それを見ると寂しくなるからという理由で、取りはずしてしまっている。しかし、その写真は、新聞や何か雑然とした「物」の下に置かれているのではなく、「彼のきれいなシャツ」(p. 16)の下に置かれている。偶然そこに置か

れただけとも考えられるが、「彼のきれいなシャツの下」と明示されている所に、妻に対する老人の暖かい心づかいがうかがわれる。夫婦でありながら、互いに別室に床を持ち、直接向かいあうことなく、壁をはさんで会話している医者と医者の妻とは好対照である。

ヘミングウェイといえば、先にプリンも述べているように、実りある男女関係を描くことはなかった。『我らの時代に』だけをみても、先に述べた「インディアン部落」、「医者と医者の妻」、「兵士の家」、「国境の雪」の他に、「事の終わり」(“The End of Something”)におけるニックとマージョリー (Marjorie) との別れ、「ごく短い物語」(“A Very Short Story”)での失恋、「エリオット夫妻」(“Mr. and Mrs. Eliot”), 「雨のなかの猫」(“Cat in the Rain”), 「季節はずれ」(“Out of Season”)での冷えた夫婦といった具合である。また、長編小説においても、『陽はまた昇る』のジェイク (Jake) とブレット (Brett), 『武器よさらば』のヘンリー (Henry) とキャサリン (Catherine), 『誰がために鐘は鳴る』のジョーダン (Jordan) とマリア (Maria) と、仲の良い恋人を描きながら、戦傷やら、異常出産やらで、若い2人の愛は結婚、そして子供の誕生へと結ばれていくことはない。

1936年に2作続けて発表された「キリマンジャロの雪」(“The Snows of Kilimanjaro”)と「フランシス・マコーマーの短い幸福な生涯」(“The Short Happy Life of Francis Macomber”)では、男女間の葛藤は先鋭化している。この2つの短編について、エドモンド・ウィルソン (Edmund Wilson) は、次のように述べている。

The emotion which principally comes through in *Francis Macomber* and *The Snows of Kilimanjaro* ... is a growing antagonism to women.⁽⁸⁾

また、セオドア・バーダック (Theodore Bardacke) も「キリマンジャロの雪」に関し、次のように述べている。

... he [Harry] cannot hide a growing antagonism toward his wealthy wife, in spite of her consideration and comfort. A “kindly caretaker” of his body, she has nevertheless become for him a symbol of the destruction of his talent.⁽⁹⁾

確かに、これらの作品におけるヘミングウェイの女性に向ける目には、厳しいものがある。

しかし、これらの女性観は、生涯かわらなかったのであろうか。『老人と海』で、老人は、海に乗りだすとすぐに、海を“she”という代名詞で受け、

She is kind and very beautiful. But she can be so cruel and it comes so suddenly
... (p. 29)

と考えている。この言葉は、「フランシス・マコーマーの短い幸福な生涯」で、狩猟案内人のウィルソン (Wilson) が考える次の言葉とあまりにもよく似ている。

They [American women] are, he thought, the hardest in the world; the hardest, the cruellest, the most predatory and the most attractive ...¹⁰⁾

ヘミングウェイは、老人に海のことを考えさせながら、同時に、女性のことも考えていたのではなかろうか。果たせるかな、先の引用の後には、

He always thought of the sea as *la mar* which is what people call her in Spanish when they love her. ... Some of the younger fishermen, ... , spoke of her as *el mar* which is masculine. They spoke of her as a contestant or a place or even an enemy. But the old man always thought of her as feminine and as something that gave or withheld great favours, and if she did wild or wicked things it was because she could not help them. The moon affects her as it does a woman, he thought. (pp. 29-30)

と続く。粗雑な若い漁師達とは対照的に、老人は海を女性と考えている。そして、それは、海を愛する者が抱くイメージである。

上の引用文中で、作者が海のことだけを言いたいのであれば、最後の文は、“The moon affects her, he thought.” で十分だったはずである。ところが、作者は、この後に、ことさら “as it does a woman” とつけ加えている。ここに、作者ヘミングウェイの女性に対する感情が感じられる。彼は、16年前に「フランシス・マコーマーの短い幸福な生涯」を書いた時と同じように、女性を残酷さと愛らしさを併せもつものとして捉えながら、一方で、『老人と海』では、たとえ何か荒々しいことや邪悪なことをしたとしても、それは自然のなせる技で、女性の責任ではない、そうせざるをえないからなのだと考えている。老人は、漁師にとって大切な仕事の間である海を、闘争相手と考え、敵とまでみなす若い漁師達とは異なり、すべてを認め、許し、鷹揚に構えている。「キリマンジャロの雪」で、作家としての才能の朽腐の原因を女と金に押しつけ、自暴自棄になっているハリーとは好対照である。

こうして、女性に対しても理解を示す老人は、当然のことながら、妻やつがいであられる魚たちにも、暖かい目を向ける。老人の妻については、既に述べた。海に出て、夜になると、小舟のまわりに、雌雄のイルカがよってくる。彼らの仲良く戯れあう息づかいが聞こえてくる。老人は、2匹のイルカに羨望の念を覚えながら、漁を続け、そのうちに、かつて雌雄のマカジキの一方を釣りあげた時のことを思い出す。あの時、オスのマカジキは、自分の身の危険をもかえりみず、いつまでも、メスのそばを離れず、老人達の釣りの邪魔をしたのだった。そして、ついにメ

スのマカジキが小舟に引きあげられると、オスは空中高く飛びあがり、メスの居場所を確認し、メスを助ける手段がないことを悟ると、初めて水中に沈んでいった。老人は、この時のことを、今でも忘れてはいない。彼は、この漁を後悔し、生涯で最も悲しい出来事だったと告げている。

『老人と海』には、作品の終わり近くで、旅行者の一人として女性が登場する他は、一人として女性は登場しない。しかし、その女性不在のおかげで、老人は、妻の写真、海、雌雄のイルカ、雌雄のマカジキという女性の代理物に暖かい目を向けている。

「海はやさしく美しい。だが、時には残酷にもなる。(中略)だが、もし海が乱暴なこと、邪悪なことをしたとしても、それは、そうせざるをえなかったからなのだ。月が海を支配しているのだ。それが人間の女を支配しているように。老人は、そう考えた。」先にも引用したこの文にこそ、即ち、このような思考ができるようになっていることにこそ、老人が、広い海で、大魚を相手にただ一人、生命を燃焼させることのできた力の源泉の一端があったのではないかと思われる。

注

- (1) Ernest Hemingway, *The Old Man and the Sea* (New York: Charles Scribner's Sons, 1952). 以下、このテキストからの引用はすべてこの版により、頁数は本文中の()内に記す。
- (2) Ernest Hemingway, "Indian Camp," *In Our Time* (New York: Charles Scribner's Sons, 1958), p. 19.
- (3) 拙論「師と弟子——『老人と海』小論」, 筑波大学・東京教育大学アメリカ文学研究会編『アメリカ文学評論』第3号(東京:成美堂, 1981) pp. 89-94 参照。
- (4) Ernest Hemingway, "The Doctor and the Doctor's Wife," *In Our Time* (New York: Charles Scribner's Sons, 1958). 以下、このテキストからの引用はすべてこの版により、頁数は本文中の()内に記す。
- (5) 旧約聖書「箴言」("Proverbs") 第16章32節からの引用。
- (6) Ernest Hemingway, "Soldier's Home," *In Our Time* (New York: Charles Scribner's Sons, 1958), p. 75.
- (7) Faith Pullin, "Hemingway and the Secret Language of Hate," *Ernest Hemingway: New Critical Essays*, ed. by A Robert Lee (London: Vision Press Limited, and New Jersey: Barnes & Noble Books, 1983), p. 173.
- (8) Edmund Wilson, "Hemingway: Gauge of Morale," *Ernest Hemingway: The Man and His Work*, ed. by John K.M. McCaffery (New York: Cooper Square Publishers, Inc., 1969), p. 253.
- (9) Theodore Bardacke, "Hemingway's Women," *Ibid.*, p. 350.
- (10) Ernest Hemingway, "The Short Happy Life of Francis Macomber," *The Snows of Kilimanjaro and Other Stories* (New York: Charles Scribner's Sons, 1964), p. 126.

* 本稿は第22回日本アメリカ文学学会全国大会における口頭発表に加筆・修正を施したものである。